



TOPICS

8月21、22日に「第37回全国子どもの本と児童文化講座箱根大会」(日本子どもの本研究会主催)が開かれました。

記念講演では、那須正幹氏より、『それいけズッコケ三人組』(ポプラ社)誕生秘話や「大人に迎合せず、読んだ後に残らなくても子どもがそれを読んでいる時間を夢中にさせる内容に」などのシリーズ全体への思い、また、『絵本で読む広島原爆』(福音館書店)の誕生までなどについてのお話がありました。

1日目は記念講演の他、基調報告・読書会等、2日目は、「絵本」・「児童文学」・「ノンフィクション・科学」など11の分科会という盛りだくさんの内容でした。(「絵本」の分科会については、裏面に詳細あり)

子ども図書研究室のテーマ展示

「クリスマス・お正月の本」(11月末まで)

「新しく入った外国語絵本」(10月末まで)

「第17回読書感想画中央コンクール指定図書」

イベント情報

読書週間記念講演会「私の出会ったイギリスの作品から」

とき 10月30日(日) 14:00~16:00

ところ 沼津市立図書館 4階 視聴覚ホール

講師 清水 奈緒子氏(翻訳家。訳書『ストライプ』『西風がふくとぎ』ほか)

定員 200人(先着順)

入場 無料 要申込み

10月22日(土)9:30より、電話にて受付。(沼津市立図書館 055-952-1234)

第18回子どもと読書講演会「読む力は生きる力」

とき 11月5日(土) 14:00~16:00

ところ 磐田市立中央図書館 2階 視聴覚ホール

講師 脇 明子さん(ノートルダム清心女子大学教授、翻訳家。著書『読む力は生きる力』、訳書『不思議の国のアリス』ほか)

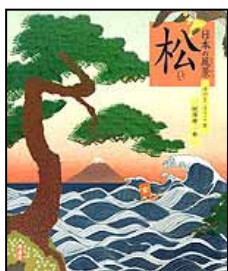
定員 150人

入場 無料 要入場整理券

入場整理券は、10月19日(水)から、磐田市立中央図書館カウンターで無料配布。(ひとり5枚まで)

新着図書から

『日本の風景 松』



絵本 気になる日本の木 シリーズ
ゆのき ようこ/文
理論社 2005年6月

クロマツ、アカマツの違いを紹介したあと、松林がなぜ海岸に多いのか、植林にどのような苦労があったのか、松脂がどう利用されてきたのかなど、日本の暮らしや文化のなかで生きてきた松について解説されている。

意匠性のある絵が面白い。切り口がユニークな知識絵本である。災いから守ってくれる木として日本人のかたわらにいつもいた松の木。昔は里山の大切な資源として大事にされ、人と共生していた。懐かしい日本の風景に欠かせない木、松。漢字が多いが、ルビ付き。(栗山)

『こんにちは アグネス先生』



アラスカの小さな学校で
あかね・ブックライブラリー11
K・ヒル/作 宮木 陽子/訳
朝倉 めぐみ/絵
あかね書房 2005年5月

アラスカでの厳しい暮らしに耐えかねて、これまでの先生は次々と去っていった。そんな、生徒数12人の小さな村の学校にやってきた新しい先生と生徒たちとの交流の物語。先生は教室に世界地図と年表とをはり、顕微鏡を置き、本を読み聞かせる。

子どもたちばかりか、村の大人たちにも学ぶ楽しさを伝えていく様子がまっすぐに描かれる。

狩猟キャンプや皮なめしなど、アラスカの生活様式や文化にも触れられ、興味深い。著者のもと小学校教師。【小学校中学年から】(鈴木)

第37回全国子どもの本と 児童文化講座 箱根大会 報告

2 日目の「絵本」の分科会では、最初に日本子どもの本研究会絵本研究部の代田氏より、2004年6月～2005年8月に出版された絵本の動向について、実際の絵本を示しながらの話がありました。そこで紹介のあった絵本の一部をお知らせすると、「わらべうたの絵本化はなかなか難しいが、『ととけっこうよがあげた』（こばやしえみこ／案 ましませつこ／絵 こぐま社 2005年7月）は、成功例。『わにわにのおふる』（小風さち／ぶん 山口マオ／え 福音館書店 2004年10月）は、擬音が魅力で、1歳児から中学生でも読み聞かせに使える。孤独な安らぎを与える本。『おんぶはこりごり』（アンソニー・ブラウン／作 藤本朝巳／訳 平凡社 2005年3月）は、ジェンダーを考えさせる本で、小学校高学年以上。『ひよこをさがしてあひるのダック』は、おもちゃっぽくない、しかけ絵本。」などです。

その後、3冊の課題図書について、読み聞かせ・実践報告と意見交換を行いました。

1冊目の『なーんだなんだ』では、「0歳児がじっと見ていた」「幼児は答えがすぐわかるが、それが本当に当たっていたことがうれしそう」など。また、この絵本は、視力の弱い赤ちゃんが、だんだん近づいてくる母親等をじっと見ることで認識するのと似ているという小児科医の意見も紹介されました。

2冊目の『ミミズのふしぎ』（皆越ようせい／写真・文 ポプラ社 2004年6月）では、「ミミズを自分で触ったことのある子どもは、興味を持つが、都会などでそういう機会がなく育った子どもたちは、気持ち悪いとしか思わないようだ」「いつもと違う子どもが反応を示す」などです。

3冊目の『シマリスのしまおくん』（あきやまただし／作・絵 教育画劇 2004年4月）は、

「絵本に慣れていない人（大人）でも手にとりやすいので、親にすすめやすい」という幼稚園の先生の言葉が印象的でした。

その他、子どもたちが、読み聞かせから、なかなか一人読みにつながらないのは、長いお話の絵本を聞く機会が少ないことが、一つの要因ではという意見がありました。

この大会の全体の報告は、雑誌（Z02-66）『子どもの本棚』（日本子どもの本研究会／編集発行）2005年11月号に掲載される予定です。

所蔵資料から

『ひよこをさがしてあひるのダック』



フランセス・バリー／作
おびか ゆうこ／訳
主婦の友社
2005年5月

泳ぎに行こうと、ひよこたちを探しに行くあひるのダック。あちこち探して回りますが、1羽も見つかりません。前へ、前へと、探しながら進んでいくあひるのダック。ところが、ひよこたちは、意外なところに1羽ずつが登場しています。片側が丸い、変形絵本。

『なーんだなんだ』



カズコ G.ストーン／さく
童心社
2004年10月

「なーんだなんだ」という繰り返しの言葉とともに、徐々にパンダが姿を現します。赤と黒と白で描かれた絵本。【0歳から】

（この面殿岡）